

ドナウ の 四季

2017年・春季号・No.34

スロヴァキアからハンガリーへ	神原 ゆうこ	1
ポピュリズムと属国民族主義が蔓延する日本	盛田 常夫	3
東京で初めて「五塊の雲」の中で見た世界	チェ・ダーヴィド	5
カガミ:鏡と化我見(かがみ)	タコー・フェレンツ	6
留学生自己紹介	北谷 茉莉子	7
	秋山 広徳	8
	渡辺 理紗子	9
完全復活したフェデラー、不振に陥った錦織	盛田 常夫	11
みどりの丘補習校	バトラー 明日香	13
日本人学校	山本 錬・林 夏子	15
リスト音楽院ディプロマコンサート		17

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE

ハンガリーを代表する赤ワインワイナリー GEREブランド製品が日本の市場へ

KÉKSZÖLÖMAG & HÉJ

ポリフェノールをふんだんに含む有機栽培赤ブドウの皮と種を粉碎したマイクロ粉末
赤葡萄の種と皮(マイクロ粉末) 150g

ポリフェノール成分: 5gの粉末はおよそ250mgのポリフェノールを含む。

使用法: 粉末をそのまま食することは避け、ヨーグルトなどに混ぜて食する。

1日の摂取量: 1日に小さじ1杯の粉末を2会に分けて摂取。



100 % SZÖLÖMAG OLAJ

ポリフェノールと不飽和脂肪酸を含んだ赤ブドウの極上冷温圧縮シードオイル
低温圧搾
赤葡萄の極上シードオイル250ml

成分構成: 不飽和脂肪酸 min. 80%, ポリフェノール min. 6%

使用法: サラダなどの冷たい食べ物に直接かけたり、パンへ直接かけて、ほのかな香りを楽しみ、食欲を増進。

1日の摂取量: 小さじ1杯(およそ5g)を毎朝、可能な限り、空腹時に摂取するのが望ましい。

小売の問い合わせ: morita@tateyama.hu

GEREワイナリー製品

日本総輸入元 立山科学ブルー プ ITM社



スロヴァキアからハンガリーへ

神原ゆうこ

私が滞在している中央ヨーロッパ大学はブダペストにあるアメリカの大学です。学生にも教職員にもハンガリー人はたくさんいますが、教育、研究だけでなくすべて

国籍はスロヴァキアですが、ハンガリー語を第一言語とする人々です。現在のスロヴァキアの領域がかつてハンガリーだったという歴史的な経緯を考えれば、このような

のようになりたいと思うようになったのです。

これまで学んだスロヴァキア語とは全く異なるハンガリー語は、独学で勉強して簡単に身につく言語ではありません。こちらに来て最初の半年は、ほぼ毎日語学学校などに通い、研究所で論文を執筆する以外の時間はほとんどハンガリー語の勉強でした。正直なところ、英語と(毎日ではないですが研究上必要な)スロヴァキア語という2つの外国語を使いながら、ハンガリー語という新たな外国語を学ぶのはかなり消耗します。ただ、かつて勉強したスロヴァキア語と違い、ハンガリー語は日本の大学に独立した学科がある言語ですので、日本語での情報が多く、勉強のしやすさは比較になりません。ハンガリー語はなかなか上達しませんが、わからない文法の解説を日本語で読むことができることによりかなり救われました。英語の文法書も簡単なものしか手に入らなかったスロヴァキア語を学んだときは、授業でよくわからなかった事項は全て覚えるという手段しかなかったもので、ずいぶん苦労しました(現在は日本語で読むことができるスロヴァキア語の文法書も出版されました)。



の管理業務も英語が使用されています。私は、日本の勤務先の大学を1年間離れ、この大学の政策研究所に客員研究員として滞在する機会に恵まれました。もともと、私はハンガリーの隣国であるスロヴァキアを対象として、1989年の体制転換以降の社会変化を研究してきました。この大学であれば、ハンガリー語ができなくても、中央ヨーロッパの研究にはそれほど困りません。実際、必要な英語文献の多くは大学図書館に所蔵されており、世界各地から招聘された研究者の講演も毎日のように開催されているので、国際学会ですら必ずしも話を聞けるとは限らない著名な研究者の講演が階段を下りるだけの距離で聞きに行けるといった、刺激的な環境で研究を進めています。ですが、近年、スロヴァキアにおけるハンガリー系マイノリティに関する研究プロジェクトにかかわり始めたため、この機会を生かし、ハンガリー語を学びつつ研究に取り組むことにしました。

隣国スロヴァキアにはおよそ50万人近いハンガリー系の人々が居住しています。

マイノリティの存在自体がスロヴァキアとハンガリーの関係の深さを示しています。とはいえ、現在のスロヴァキアの日常生活で会うハンガリー系の人々はノンネイティブにはわからないくらい流暢にスロヴァキア語を話し、スロヴァキアとハンガリーとのつながりを意識する機会はありませんでした。スロヴァキアの研究をはじめて10年くらいで一つの区切りを迎えたころ、スロヴァキアを研究しているからと言って、人口のおよそ1割を占めるハンガリー系の人々のことを知らないままにいる自分に疑問を持ち、ハンガリー系の人々にも関心を持つようになりました。私の専門である文化人類学は、現地の人々のコミュニティに出かけて行って聞き取りをしたり、その地域の活動に参加したりすることによって得られるデータを重視します。多くのハンガリー系の人々はスロヴァキア語も話すので個別のインタビューは可能ですが、ハンガリー系の人々同士は互いにハンガリー語で話すので彼らの話は理解できません。そのため、多少はハンガリー語ができ

先日、普段は使わないスロヴァキアの携帯電話番号の有効期限が切れかけていることに気が付き、あわててスロヴァキアに携帯電話のクレジットを買いに行かなければならないことがありました(スロヴァキアで私が契約している携帯電話は、定期的にクレジットを購入することで番号が維持される仕組みとなっていたのです)。電車でコマーロムまで行き、さらに徒歩で国境を越えてスロヴァキアのコマーロムに渡り、携帯電話のクレジットが買える店舗に入りました。ハンガリー系の人々が多いスロヴァキア南部の町らしく、店内で先客が店員とハンガリー語で話したので、「こんにちは」とハンガリー語で挨拶しました。しかし、続きのハンガリー語で出てきません。スロヴァキア語で「携帯電話のクレジットを購入したいのですが、10ユーロ分お願いしま

す」と話すと、店員はスロヴァキア語で手続きをしてくれました。

会計をしながら「いま私はハンガリーに住んでいるのですが、前はスロヴァキアに住んでいて・・・」と再びハンガリー語で話しかけましたが、やはり続けられなくなったので「スロヴァキアの銀行口座は解約してしまったからウェブでチャージできなくて。こうやってスロヴァキア国内でチャージするしかないのですね」とスロヴァキア語に切り替えて話を続けました。さすがに店員も不思議な顔をしつつ、「今はハンガリーのどこに住んでいるの？コマーロム？」ハン

ガリー語で返してきました。

私 「いや、ブダペストに住んでいます。(ハンガリー語)」

店員「前はスロヴァキアのどこに住んでいたの？(ハンガリー語・推定)」

私 「？」

店員「前はスロヴァキアのどこに住んでいたの？(スロヴァキア語)」

私 「ブラチスラバです。(ハンガリー語)」

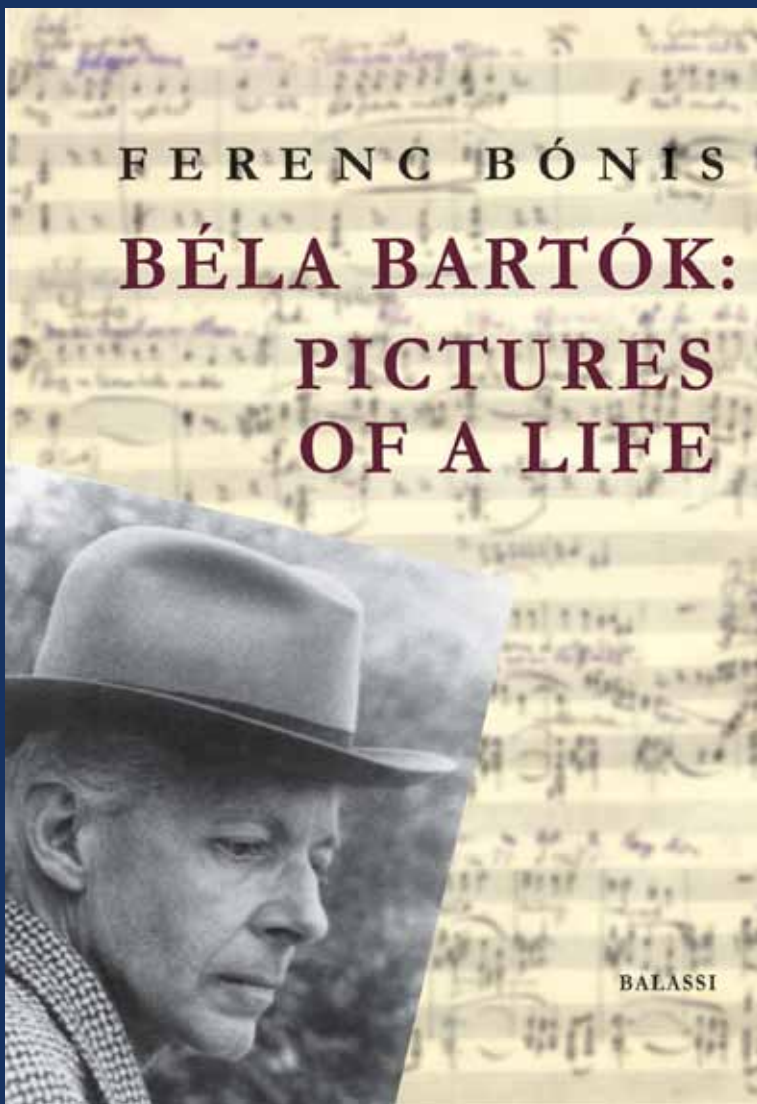
些細な経験ですが、半年前には何を言っているか全くわからなかったスロヴァキアのハンガリー系の人々の会話に、自分が

少し加わることができたことで、あらためてスロヴァキア南部が二言語を話す世界であることを実感し、よく通った地域をより深く知るための一歩を踏み出した気持ちになりました。この地域のことは、両方の言語を知らなくても理解できるかもしれませんが、両方の言葉を理解することで初めて分かることもあるのではないかと、帰りの電車では、そんなことを考えました。

(かんばら・ゆうこ

中央ヨーロッパ大学・政策研究所)

バルトーク研究30年が結実したバルトークの生涯を知る写真と解説 — 待望の英語版が発刊



With the help of 843 photographs and related documents, this handsome volume presents the life and work of the world-renowned Hungarian composer Béla Bartók. The book, written and compiled by esteemed Bartók researcher Ferenc Bónis, who has dedicated decades to the composer's life and art, is his most voluminous and detailed study to date, containing the author's latest findings. Besides Bartók's activities in Hungary, it acquaints the reader with the composer's trips abroad, his reception, and his last years in America.

Béla Bartók: Pictures of a Life is an invaluable aid for Bartók scholars, musicians playing Bartók's music and, at the same time, it is also enjoyable and enlightening reading for all audiences who love and respect the great composer, both as a great musician and a concerned human being.

Translated by Judith Sollosy

A/4, 546 pages, hardback with dust jacket

Price: 40 USD

(When mail ordering, the postal and bank expenses are added to the price which, in the case of Japan, comes to 110 USD)

To order please contact: balassi@balassikiado.hu

BALASSI KIADÓ
Budapest, Hungary, 2017

ポピュリズムと属国民主義が蔓延する日本

盛田 常夫

ポピュリズムとは何か

市井の人々は日々の生活を送るので精一杯だから、10年後や20年後、あるいは50年後に国がどうなるかなど考える余裕はないし、考える意味もない。ふつうの国民にとって、遠い先のことより、目先の利益が最大の関心事になるのは自然なことだ。だから、国の累積債務によって10年20年後に社会保障が大幅に削減されることより、とりあえず年金が減額されず健保の自己負担が増えないことや、派遣から正社員への登用や賃金の引上げなどははるかに切実な願いだ。国や地方自治体の債務が増えようが、とりあえず身の回りの生活条件を向上してもらおうことを選ぶ。国や自治体の借金の累積が将来の社会にどのような影響を与えるかなど、考えたこともないし考える余裕もない。社会的な停滞の時代、社会が次第に老年化する時代には、保身の保守的行動様式が顕著になる。

こういう時代こそ、将来社会を見据え、長期的視野に立った政治が必要とされる。高度成長時代を終えた日本は、これまで経験したことのない、社会が縮小する時代に入りつつある。未知の将来社会をどうやって描いていくのか、どのような社会的整備が必要になるのか、老年化する地域社会をどのように維持していくのか、巨大なインフラの維持管理をどうするのか、原発をどうするのか、健康保険や年金制度をどう維持し変更しなければならないのか、国民はどのように社会保障費用を負担していくか、そのために税制をどう変革しなければならないのかなど、日本社会が抱える課題は非常に重い。

こういう時代の転換期には、株式や為替の動きに一喜一憂するような目先の利益を追う政治ではなく、長期の未来を見据えた政治が必要だ。権力維持や選挙のことしか念頭にない政治ではなく、国の将来を思い、将来社会の建設に精を出そうとする賢くかつ知性にあふれた政治だけが、国の危機を救う。

ところが、現代の政治家は、東西を問わず、将来社会の行く末を見据えて国を治めるのではなく、権力維持や権力奪取のために、目先の利益を追う人々の感情や行動に諂(へつ

ら)い、国民の素朴な感情に依存する行動様式をとる。これが現代政治のポピュリズムである。国民感情に諂う政治という視点から見れば、右も左もそれほど大差ない。政権政党は経済成長で債務問題は解決されるという幻想を、反政権政党は大企業への課税で債務問題は解決できるかのような幻想を振りまく。どちらも根本的な問題解決にならないが、そんなことは政党にとってどうでもよい。当面の国民の支持を得られるか否かが最大の関心事なのだから。ポピュリズムの政治はいわば行き当たりばったりの政治で、将来の国家設計に責任を持たないし、持ちえない。だから、ポピュリズムの政治が蔓延する社会は、後世の世代に大きな負のレガシーを残す。

こういう時代にこそ、国民がもっと賢くならなければならない。中央政府や地方政府から給付を受けることだけを考えるのではなく、その給付に見合った負担をどうするのかを考えなければならない。政府も地方自治体の財政も国民の税収から成り立っているのだから、将来社会に負のレガシーを残さないような社会的給付や負担のあり方を議論しなければならない。二進も三進も行かない危機的状況が顕在化してからでは手遅れだ。前広に十分に時間をとって、将来の社会や国のあり方を議論すべきだ。ポピュリズムはそういう時代の課題に解決を与えるのではなく、解決の基盤を崩してしまう。ポピュリズムが蔓延する社会に未来はない。

累積債務1000兆円は国民の債務か、それとも債権か

アベノミクスは典型的なポピュリズムの経済政策である。この目先の利益を追う経済イデオロギーを積極的に支持する「経済学者」や「エコノミスト」の一団がいる。権力に寄り添った発言を繰り返せば、政府機関の要職を得たり、マスコミに顔を出す機会が増えたりして、講演料などの小さくない稼ぎができるからだろう。こういう俗物的な「アベノヨイショ」が精を出しているのが、公的累積債務問題を軽視できるレトリックの「発見」である。その典型的で詐欺的なレトリックは、以下の四つの

パターンに集約できる。

(1) 国の債務は国民の債権だから、国民1人当たり900万円の借金という表現は間違っている。「国家債務問題は存在せず、国民債権が存在する」という債務と債権の論理のすり替え。

(2) 政府はさまざまな国家資産を保有しているから、資産と債務を相殺すれば、純債務残高は大幅に削減する。だから、「累積債務の粗額で大騒ぎすることなどない」という帳簿いじりの楽観論。財務省出身の「経済学者」、高橋洋一の持論だ。

(3) 日本の公的債務のほとんどは国民が保有しており、国外の投資家の保有率は極めて低い。だから、「日本の財政に何の心配も要らない」という論理不明瞭な議論のすり替え。これを声高に主張している三橋某という「三文評論家」が、全国を回って講演料稼ぎしている。

そして、極めつけは、

(4) 政府の国債のかかなりの部分が日銀に保有されている。政府と日銀は親会社と子会社の関係にあるから、「債務と債権は相殺されて、実質上、債務はゼロになる」という幼稚なレトリックである。これはいわば政府部門の粉飾決算をやれば、公的累積債務が消滅するというデマゴギー。テレビでも「評論家」として顔売っている森永某がしたり顔で語る「発見」で、難しい議論が苦手な安倍首相が、「政府債務と日銀債権は連結決済されるよね」と、本気で信じようとしている論点でもある。アベノミクスによる税収増で債務が解消されないことが分かった現在、安倍晋三が頼みにするスピリチュアル操作である。

さて、上に見た4つの論点はどれも間違っている。

(1) 確かに国債という国の債務を国民が保有していれば、国民は国に対する債権を保有していることになるが、問題の本質はここにはない。国の債務は将来の税収の先取り消費の結果だから、最終的に将来の税収で補填しなければならない。だから、国民の保有する国債は最終的に国民の負債なのであ

る。さらに、巨額に積み上がった国債は不良債権になる高い蓋然性を有している。これだけの巨額の債務を将来の経済成長によって解消できるとは誰も思っていない。だから、わざわざ浜田内閣参与がアメリカから連れてきたノーベル経済学賞受賞者シムズが主張するように、もっと財政を拡大して、インフレ率を上げて、累積債務を割引する政策が推奨される。膨大な国家債務を解消する最後の手段が、高インフレによる借金の実質的な減額か、徳政令による借金棒引きであることは、昔から良く知られた財政再建の手法である。アメリカからわざわざ招聘する必要もない無責任な議論である。この政策主張もまた、「国の債務である公債は、最終的に、国民の債務である」ことを明瞭に教えている。

(2)高橋洋一がいろいろな理屈をつけて政府資産を増やして純債務を小さく見せても、実際に短期間のうちに資産売却が実行されなければ、この帳簿操作に何の意味もない。累積債務1000兆円が意味しているのは、「すでに国や国民が1000兆円を消費してしまった」ことだ。帳簿上の政府資産額をどのように増やしても、すでに消費された1000兆円が戻ってくるわけではない。だから、どのような帳簿操作をおこなっても、この1000兆円は将来の世代が背負わなくてはならない負のレガシーであることに何の変わりもない。もし純債務を実際に小さくしようとすれば、資産売却を進めなければならない。実際に資産が売却されて、累積債務が削減されれば、将来世代への負の遺産の継承額が小さくなる。しかし、それは債務超過の家族に、家を売って借金を返済しなさいというのと同じで、政府にとっても簡単に実行できることではない。

(3)日本の国債のほとんどは国内消化されているから、「日本の財政破綻を心配する必要はない」はずがない。それは、高々、国際投資家の投機に晒されないというだけのこと、累積債務が最終的に国民の租税から補填されなければならないという事実が変わるわけではない。租税収入による補填が不可能であれば、インフレによる債務の実質的削減か、債務の棒引きという選択肢が残るだけである。

(4)粉飾決済を信じたい安倍首相の心境は理解できるが、これはきわめて幼稚な思考だ。親会社の債務を子会社に移して、連結決

済で親会社の債務がなくなるのなら誰も苦労はしない。藁をもすがる思いで架空の物語を信じたいくなるのは、アベノミクスが破たんしていることを感じているからだろう。

これらの「アベノイシヨ」が目をつむっている事実、つまり誰がどう言い繕っても変わらない事実、「国と国民がすでに1000兆円を消費してしまった」ということだ。その事実を帳簿操作で減額することも、帳消しにすることもできない。これが累積債務問題の核心である。だから、アベノミクスによる目論見の破綻が明白になり焦る安倍内閣は、国民資産を投機的投資に振り向けているが、これは国民資産を棄損させ、国家の累積債務をさらに増やす可能性が高い。そうなれば、将来世代に先送りされる負担がますます大きくなる。その意味で、アベノミクスは真の問題を隠し、脆弱な政府の財政基盤を棄損し、将来社会の基盤を取り崩す政策である。

こういうポピュリズム政策は百害あって一利なしだ。政権維持の策を練るだけの能力しかない政治家に、日本の将来を任せてはいけないのだ。もっと知性のある長期的視野に立った政策を展開できる政権が必要なのだ。ただ、野党にその力があるとは思われない。同じポピュリズムの土壌の中で政争に明け暮れているだけだからだ。

日本のみならず、世界のほとんどの国には、国の将来を憂う、真の政治家などほんの一握りしかいない。だから、国も社会も、同じ過ちを何度も繰り返すのだ。

属国主義と民族主義の奇妙な統合

一日和見右翼

時代が大きく変わる歴史時代には、未来の社会の青写真を描く、優れた指導者が現れる。混沌とした時代から抜け出す道筋と、抜け出した後の社会を描くことによって、人々に行動の指針を与える。日本の歴史で言えば、群雄割拠の戦国時代から封建的統一国家による支配体制を固めた徳川幕府成立や、封建国家から近代絶対主義国家を樹立した明治維新がそれにあたる。

これにたいして、第二次世界大戦後の日本社会には時代を切り開く有能な政治家が現れていない。天皇制の絶対国家から近代民主主義国家への転換は、日本国民にとって、

非常に難しい課題だった。アメリカに国家主権を奪われたことが、自らの社会を自らの力で作り上げていくという力と創造性を奪ってしまった。それでも、戦後直後の政治家のなかには、アメリカの占領を早急に終わらせ、日本が再び独立国家として国際的な認知を受けよう試みた政治家もいたが、戦後の冷戦時代の主役になったアメリカは国際政治における日本の自立を許さなかった。日本をアメリカの世界戦略へ組み込む軍事的従属は、次第に日本の政治家を去勢することになり、国民もまた政治家と同様に、自らの頭で考えることを止め、アメリカの属国として生きることに慣れてしまった。

日米安保条約はアメリカ占領軍の日本駐留を継続させるための枠組みに他ならない。アメリカの軍事支配から抜け出すという戦後初期の目標は早々と投げ捨てられ、アメリカのご機嫌をとることが保守政治の基本になった。「日米同盟」という聞こえの良い枕詞で、日本がアメリカの軍事主権に従属していることを隠ぺいしてきた。その結果、日本がアメリカの属国であることに違和感を喪失してしまったのが、現代日本である。

この3月に橋下徹がワシントンまで出向いて、「トランプ政権が日本に圧力をかけて、アメリカのために日本人が血を流すことも厭わないように仕向けるべきだ」というピント外れのことを平気で講演した。まさに属国民族主義そのものである。属国主義と民族主義という二つの相容れない主義主張が、一緒になっているところに、現代日本の右派の偏頗な民族主義の特質がみられる。これはいわば「日和見民族主義」だ。

憲法9条のおかげで、戦後最大の戦争犯罪であるアメリカのヴェトナム戦争に、日本は参戦することを免れた。後方支援で米軍の展開に協力したが、韓国のように精鋭部隊を派遣し、アメリカ軍に勝るとも劣らない残酷なヴェトナム人殺戮をおこない、村から都市へ流れて売春婦にならざるをえなかったヴェトナム婦人を集めて慰安所を作るような真似をしなくて済んだ。橋本徹はアメリカが絶対正義の象徴であるかのように考えているが、それが思考を誤らせる躓きの石だ。

属国民族主義からの脱却は、日本人が長らく忘れ去っている真の民族としての自立の課題なのだ。

東京で初めて「五塊の雲」の 中で見た世界

Cseh Dávid

私は今年の2月に初めて東京に行きました。4日間しかこの日本の首都で過ごせませんでしたが、面白くて、素晴らしい旅でした。明治神宮や皇居の東庭を見たり、渋谷や銀座の人ごみの中を歩いたりするのは以前から私の夢でしたが、はじめて東京の賑やかさの中に立った時はまるで信じられませんでした。中でも、私にとって一番大きい影響を与えたのは宝生能楽堂で見た五雲会です。どうしてでしょうか。

能楽は日本の古い伝統的な芸術です。今日の観客には大変難しい演芸ですが、中世の時代と禅の美学の美しさは、みんな理解できなくても感じるすることができます。謡(うたい)の音楽は厳かで、



ダンスは抽象的で、リズムは非常に遅くて、すべてが夢のような、時間がない無形の世界を表しています。私は長い間この演芸に強い興味があったのですが、今回の旅で初めて本物を自分の目で見ることができました。世界中で一番有名な観世流ではなく、宝生流の演技を見ました。それは五雲会という一日がかりの特別プログラムで、「絵馬(えま)」、「兼平(かねひら)」、「吉野静(よしのしずか)」、「船橋(ふなばし)」という能の演目に加え、「盆山(ぼんさん)」と「富士松」という狂言もありました。

ところで、どうして五雲会というのでしょうか。その理由は、宝生流のシンボルが、五塊の雲だからです。宝生流で能の勉強をしている生徒たちは雲を扇に描きます。五雲会はトレーニング中の能

楽者の勉強会として始まったもので、現在も若手を中心とした演能会です。私が見た2月18日午後12時から午後18時までの舞台でも、4人の若い才能あるシテ方が観客に自分の芸を見せて練習していました。

五雲会を見るまで、私はこのような勉強会があることを知りませんでした。上達したいと考えている若手にとって役に立つ、とても大切なことだと思います。みんなまだ自分のスタイルを磨いている途中で、どのような能楽を演じたいかと自分自身に問いながら舞台上に立ちます。能の観客は20~30年前からどんどん少なくなっているのに、五雲会ではわかりやすい能も上演することで、新しい観客を能の世界に誘っています。五雲会のプログラムでは四つの演目それぞれについて難しさのレベルも書いてあります。

この宝生能楽堂で過ごした6時間はとても面白かったです。休憩は3回で、10分ずつしかありませんでしたが、能が好きな人たちと一緒ににおにぎりを食べたり、お茶を飲んだりできたのですごく嬉しかったです。また、能管の音を初めて生で聞いた時はびっくりして、他の世界に持っていかれたような感じがしました。私は雲の中を飛んでいるみたいにウァーと思いました。

この東京での4日間で、日本の首都は雲の中を飛んでいるところだと何度も思いました。皇居の東庭や浜離宮恩賜庭園に立った時もそういう気分でした。こういった伝統的な場所は、現代の東京のどんなに高いかわからないようなタワーに囲まれて、まるで空の中に浮かんでいるようでした。東京では、昔と現在と将来が全部一緒に生きていると思いました。

だからこそ、宝生流の五雲会は大事なものです。昔の能

と今の能に比べて、将来の能はどうなるのでしょうか。600年前に生まれた能楽は、これからも生きて飛ぶことができるのでしょうか。それとも高いタワーに囲まれて闇に消えてしまうのでしょうか。五塊の雲の中に、そして観客の心の中に飛んでいけますようにと、心の底から祈っています。

(チェ・ダーヴィド 演劇論、劇作家論、日本美学研究者)

カガミ：鏡と化我見(かがみ) 1人の人文科学者としての、自分の 研究課題に関する一考察

Takó Ferenc

おそらくみなさまもお考えのように、「研究」と呼ばれるものは、深ければ深いほど説明しにくくなります。研究の基本的な内容、一般化の方法、長期的な目的などは比較的簡単に説明できなければならないと思われていますが、「何を研究しているの?」、「どうしてこれとこれを調べているの?」などと聞かれると、研究者はよく返答に困るようです。所謂「思想史」または「哲学史」という分野で研究をしている私自身もその感じをよく知っています。本稿では、それにあえて直面し、自分の研究の中心にある問題点を、日本語の掛詞に見られる豊かさを使って明らかにしたいと思います。

私は、諸文化の思想的および哲学的な伝統がどのように他の文化の思想または哲学に導入されたかということについて研究しています。そのような文化と文化との「出会い」の典型的な例は、明治時代の日本だと思います。私の研究方法は基本的に、明治時代の人々が西洋の諸文献を日本語に訳したものを讀んだり、その文献について書かれた論文を分析したりして、その時期の思想家たちの考え方を調べることです。しかし、日本の思想家たちの考え方に興味を持っているなら、なぜ、彼らが日本文化について書いたものではなく、彼らの西洋文化についての意見を調べるのでしょうか。つまり、私はなぜ、ただ一つの文化の思想史だけではなく、二つの文化が相互に接する点を研究しているのでしょうか。

この質問を読むと、おそらく所謂「比較研究」が思い浮かぶのではないのでしょうか。「比較研究」というのは、あることを知るために、そのこととの共通点と相違点が見られるような別のことと比較する、という研究方法です。その方法は、もちろん、思想史学の領域においても重要です。しかし、筆者の行っている研究の中心にあるのはそういう比較ではありません。また、明治初期の洋学の例に見られるように、ある新たな教えや思想の一部が、国や地域にもともとあった文化に大きな影響を与えることがよくあります。それもとでも大切なことですが、私の研究の原動力ではありません。

私の研究の一番重要な動機は、いってみれば「カガミの現象」という問題です。この「カガミ」という言葉はあまり学術的な匂いがありませんが、諸文化の変化を適切に表現できる言葉だと思います。私は「カガミ」について次の二つの意味を考えています。

第一に、この「カガミ」というのは、鏡の普通の意味の通り、ある文化・思想伝統は他の文化・思想を知ることによって、自分のことを見られるようになる、ということを示しています。もちろん、明治初期の思想家は最初から自分のことを知りたかったから西洋文化に触れたのではなく、本当の興味を持っていたに違いありません。

しかし、私の研究視点から見れば、興味というのはただある結果の根源としてのみ重要性を持っています。他の文化を知ることの結果は、ただその文化についてある想像が創られることだけではありません。例えば明治初期の思想家たちは、西洋文化・思想を知ったことによって、言わば「西洋の鏡」を通して自分の文化も「外の」立場から調べることができるようになりました。その点では、彼らの「洋学」は江戸時代の「国学」、文字通りにいえば「自分の国を学ぶこと」と連続的につながっていたと言えます。

第二に、その「カガミの現象」は、ただ単に明治期の思想家たちにとって自分たちの生きた時代を西洋の「鏡」を通して見られるようになっただけではなく、西洋の歴史や母国の歴史、つまり変化についても西洋哲学の見方を通して考えられるようになったということです。ですから、私は「化(か)している我(が)々を見(み)る」という意味で、この現象は「化我見(かがみ)」と呼ばれてよいのではないかと考えています。少し妙な言葉遣いですが、「鏡」と「化我見」、この二つの表記による二面性は、上に書いた現象の二面性もよく表していると思います。つまり、明治時代の日本の思想家たちはliberty, rightなどという新たな概念を日本に導入しましたが、libertyが「自由」、rightが「権利」となることによって、言葉、漢字などを通して日本の伝統的な思想をこの概念の理解に利用しました。そして、それは「自分」の理解にもつながっていったと言えるでしょう。新しいものに影響を与える伝統と、伝統を理解しようとする新しいもの、その特徴や違いが一番明らかになるのは、他の文化との「出会い」、言い換えれば「カガミの現象」に他ならないと思います。

(タコー・フェレンツ)



留学生自己紹介

ディプロマコンサートを終えて

リスト音楽院大学院ヴァイオリン科
北谷 茉莉子

リスト音楽院のマスター(大学院)コースに留学して早くも1年半が経ちました。

私がここに留学を決めたのは、桐朋学園大学在学中に岐阜や東京で何度か Szabadi Vilmos 先生のレッスンを受ける機会があり、先生のその奏法や音楽表現のすばらしさと具体的で的確なアドバイスに魅了されたのと、リスト音楽院では私が特に学びたい室内楽やオーケストラの授業が充実しているからです。

日本にいた時には、ハンガリーやブダペス

室内楽のレッスンと合わせ、オーケストラのある時期は本番1ヶ月前から週2回のリハーサル、音楽理論やハンガリー語の授業への出席、夜はコンサートを聴きに、等々、毎日が忙しく時間が経つのがあっという間で、気づけば留学生活も後半に入っていました。

リスト音楽院のホールでの演奏会は無料で、他のホールやオペラ座にも格安の学生券があり、世界的な演奏家が頻繁にやって来るので、毎週素晴らしい演奏が聴けるのは本当にありがたいことで、練習にもさらに気合いが入ります。

室内楽はハンガリー人を含め様々な国籍の学生と組む機会がありましたが、ハンガリー人のメンバーと組んだ弦楽四重奏では、演奏のこだわる部分も、音の出し方や歌い

留学生活で一番苦勞したことは、数多くの曲を同時にこなさなければならないことです。

海外では当たり前のことかもしれませんが、ソロの曲も室内楽の曲も常に多くのレパートリーを持ち、本番に臨まなければならないペースでのんびり勉強していた私にとって、数多くの曲を限られた時間の中で弾けるようにする事はとても大変なことであり、特に留学生活始めて間もない頃は、どの曲も中途半端な仕上がりで、先生から厳しい言葉をかけられることもありましたが、レパートリーが増えたことで有り難いことに本番の機会も多くなり、色々なタイプの曲を勉強することで音楽に対する見解も広



トについての情報はあまり無かったので、こちらに来るまではどんな所なのか、全く知識がありませんでした。でもこちらに来てみると、歴史のある建物や景観の美しさ、優しい人々、美味しいハンガリー料理、日本人学生にとっては生活しやすい物価等、すべてが私の音楽のモチベーションを上げてくれました。

マスター生としての留学生活ですが、週2回のヴァイオリンのレッスンと、毎週2組の室

回しも全然違って、楽譜に書いてあることも大事ですが中でも「自由に」演奏することが大事だなと感じました。メンバーは皆優しい人達で、接しているうちにハンガリー語の日常会話も大分覚えることができました。

また、室内楽の先生方も現役の演奏家なので、レッスンではその場で弾いて下さり、その奏でる音の素晴らしさに毎回、目からうるこでした。

その一方で、大変なこともありました。

がりました。

問題にぶつかって悩んでいる時、親身話を聞いてくれるのは、共に学んでいる日本人留学生の仲間です。練習の仕方や日常のことで沢山のアドバイスをくれたり、本番前に試演会をしてお互いの演奏を聴き、率直な意見を言ったりします。時には手作り料理を持ち寄ってホームパーティーをしたり、練習の後に飲みに行ったりと、仲間との一緒に過ごす時間は本当にかげがえのないも



留学生自己紹介



のです。

あと、日本語を勉強しているハンガリー人が実はとても多く、最初に会った時は話す日本語のレベルの高さに驚かされました。時々行われている、現地日本人と日本語の話せるハンガリー人の交換授業や親睦会で知り合った人達との交流も楽しいです。

忙しい中でそんな息抜きできる時間もあったからこそ、ここまで留学生生活を乗り越えてこられた気がします。

この原稿を書いている3日前(3月22日)に私の修了リサイタルがありました。40分もあるBrahmsのヴァイオリンコンチェルト全楽章に加え、Bachの無伴奏ソナタと室内楽曲を1日で演奏するというとても大きなプログラムであり、しかもオーケストラとの共演も初めてで、以前同じ曲を長い時間をかけて勉強していた自分には信じられないことで、果たして本番に間に合うのかと、不安な毎日でした。

ですが、演奏会当日は素晴らしいオーケストラと共演者に恵まれ、周りの方々の応援もあって、おかげさまで心から楽しんで演奏することができました。また聴きに来て下さった方々からは温かい賞賛の言葉も頂いて、ヴァイオリンを続けてきて本当に良かったと実感しました。

今年の6月でマスターを卒業しますが、さら学びたい気持ちが強く、ハンガリーでももう少し勉強を続けることにしました。私は将来オーケストラに入りたいと思っているので、今後ヴァイオリンのソロはもちろん、オーケストラや室内楽にもっと力を入れたいです。そして、これから多くのコンサートに行き、様々な国や場所を訪れて、ヨーロッパの音楽や歴史、文化にもっと理解を深められたらと思います。

最後に、私の留学生生活を支えてきて下さった周りの方々には感謝の気持ちでいっぱいです、ありがとうございます。

(きたたに・まりこ

リスト音楽院大学院ヴァイオリン科)

放射線治療の研修へ

ハンガリー国立がん研究所

秋山 広徳

2016年9月から1年間の予定でブダペストに滞在し、XII区にありますOrszágos Onkológiai Intézet(英名: National Institute of Oncology、以下Intézet)に受け入れていただいております。主に舌、頬、唇などにできた癌の放射線治療について診療、教育方法、研究を研修しております。こちらに滞在し半年程経過いたしました。これまでを振り返らせていただきます。

留学決定

2014年4月に初めてブダペストを訪れました。ウィーンで開催された欧州放射線腫瘍学会への参加がきっかけでした。その際に、指導医の先生のご縁によりブダペストを訪れる機会をいただき、Intézetを見学させていただきました。滞在は3日間でしたが、Intézetの先生方のご配慮により大変充実した時間を過ごしました。特に、日本では手術されることが多い舌、頬、唇などにできた癌に対して、放射線治療が活発になされており非常に印象に残りました。帰国後、勤務先から留学の機会を得ることができ、IntézetのProfessor へ留学の可否を打診いたしました。そして2015年4月に許可を得ることができました。

留学準備

海外長期滞在の経験が無く、準備期間中は多くの人の話を伺いました。重要なのは査証および滞在許可証の取得、住居およびネット環境と理解しました。査証取得に関しては、大使館の方に大変お世話になりました。また、現地での滞在許可証取得、住居選定およびネット環境整備には、現地の方に大変ご尽力いただき、日用品買い出しもお手伝いいただきました。留学初日には、勤務先の先生にご紹介いただきまし

た通訳の方に空港までアテンドしていただき、無事滞在先に到着することができました。準備期間中の反省点としましては、ハンガリー語をまったく学習しなかったことです。現地に参りまして痛感いたしました。

研修内容

癌治療で放射線治療を選択する患者さんは日本と比較し欧米では倍以上いらっしゃいます。Intézetでは、自分の専門であります舌、頬、唇などにできた癌の放射線治療が活発になっております。これらは手術でも治療されますが、見た目や機能が大きく損なわれることがあります。そのため、放射線治療の果たす役割は非常に大きいと考えられます。研修内容は、診療、教育方法および研究です。

診療では、診察や手術の見学および介助をさせていただいております。Intézetの先生方は、英語、独語を話されます。自分に対しては英語を使っていただけで大変助かっております。しかし、患者さんにはハンガリー語で会話されます。患者さんの中には英語を話される方もいらっしゃいますが、体の不調などの細かいニュアンスなどは、英語ではやはり伝えにくいと思われま。また、ハンガリー語のほうが気持ちが落ち着くと思われま。自分もハンガリー語の習得に努めてはいますが、難しいと感じて



◆◆◆◆◆ 留学生自己紹介 ◆◆◆◆◆



ます。また、コンサートなどのイベントにも参加を心がけております。日常生活は、温かいハンガリーの方のご厚意により問題なく過ごしております。

こちらに参りまして、自分の生活を振り返ることが多くなりました。人との出会い、ご縁が大切であると改めて感じております。数年前までは、自分がブダペストで1年過ごすことになるとは夢にも思っていませんでした。日本で御指導いただいております先生方との出会いがあったお蔭で、それが実現しました。また、ハンガリーでは、Intézetの先生方をはじめ多くかたのご縁をいただき、無事に楽しく毎日を過ごしております。自分を支えていただいております、すべての方へ感謝を申し上げ、その出会い、ご縁を

実らせるために残りの研修生活に全力を尽くしたいと考えております。また、帰国後は当地で学ばせていただきましたことを日本の方に伝えるとともに、ご縁があり、ハンガリーへの留学を希望される方のお手伝いが少しでもできればと考えております。縁あってハンガリーに滞在していますことを心より嬉しく、また誇りに思います。

(あきやま・ひろのり)

ハンガリー国立がん研究所)

「これだ!」と思えた大きな幸運

リスト音楽院ピアノ科パートタイム生

渡辺 理紗子

リスト音楽院は、私の日本の大学(愛知県立芸術大学)の交換留学提携校なので、日本に居た頃、その留学報告会で先輩方の話を聞いて、私もいつか自分もリスト音楽院に留学したいと言う思いを温めていました。

私はプラハやウィーンでの講習会に参加したことがあり、数週間の滞在でしたが、毎晩コンサートやオペラを鑑賞して、ヨーロッパの街並みを歩き、言葉を聞き、文化に触れるという経験をして、ヨーロッパでクラシック音楽の勉強をすることと、遠い海の向こうの島国で勉強するのは、環境が全く違うことに身を持って感じ、いつかヨーロッパに住んで、より深く音楽の勉強がしたいと思うようになっていました。そして、少しでも早いうちに留学経験を積みたいとも考えていました。さらに、当時の自分の語学力を考えると、ドイツやフランスの音楽大学よりも、英語で授業を受ける事のできるリスト音楽院の方が自分には向いていると思い、留学先をリスト音楽院に絞り、留学に挑戦する事を決めました。

幸運なことに、私は交換留学生としてリスト音楽院に在籍できることになり、guest studentとしてリスト音楽院の学部生と同じように授業を受講することができました。私は興味のある授業はすべて受講しました。初めの頃は、慣れない英語の授業を理解することが難しかったのですが、親しくなった中国人の友達が授業の後に補足や説明をしてくれたり、ノートを貸してくれたりして、私を助けてくれました。また、語学力不足だけではなく、とりわけソルフェージュの授業にはとても苦勞しました。ハンガリーのコダーイ・メソッドの階名の読み方から始まり、ソルフェージュとアナリーゼは全て移動ドで考えなければならなかったのです。それにはかなり戸惑いながらも、日本のソルフェ

おります。日本にいる間にある程度は習得しておくべきであったと反省しております。

IntézetはSemmelweis UniversityのDepartment of Oncologyも兼ねています。そのため学生さんの教育および実習が行われており、その見学をさせていただいております。その際、先生方の学生さんへの接し方や講義方法などを身に付けたいと考えております。

Intézetの先生方は、非常に多忙な診療および学生教育に加え、その成果をactiveに研究・発表されております。その先生方のご指導で自分も研究の一部に関わらせていただいております。その成果を2017年5月に行われます、Hungarian Society for Radiation Oncologyで発表させていただきます。また、発表内容をさらに深めまして、論文として公表させていただく予定でございます。

生活

少しでもハンガリー語を習得すべく、毎週1回、通訳の方からレッスンを受けており

完全復活したフェデラー、不振に陥った錦織 —その原因を分析する

盛田 常夫

驚異的な復活

テニス界の史上最高選手といわれるフェデラーが、昨シーズン途中で膝の治療のために長期休養に入った時点で、ほとんどのテニスファンはフェデラーの引退を想定した。年齢も35歳に達し、ここ数年のパフォーマンスは下降の一途を辿っていたから、長期のトーナメント離脱は選手生命にとって致命的なレベル低下をもたらすだろうと考えた人は多い。だから、復帰後の今年の全豪オープン5回戦で、錦織—フェデラー戦が実現した時には錦織の楽勝で世代交代かと思われたが、その予想は外れ、フェデラーは錦織撃破の余勢を駆って、全豪タイトルまで取ってしまった。

続く、ATP1000(グランドスラム4大会に次ぐ、優勝ポイント1000の大会で、年間9大会開催)のIndian Wells(カリフォルニア)でも優勝し、4月3日に決勝を迎えたATP1000大会のMiami Openでもナダルを破って優勝した。

この3ヶ月間でフェデラー選手が荒稼ぎしたATPポイントは4000ポイントである。これは錦織選手が1年かけて獲得したポイント数に匹敵する。

Indian Wellsでフェデラーが優勝した3月19日、スキージャンプW杯ノルウェイのジャンピング大会(HS225m)で、44歳の葛西選手が見事2位に入賞した。年齢で一回りも二回りも違う並み居る若手のホープを押しのかけた結果に、大会に参加した各国選手も役員も喝采を送っていた。選手でも恐怖心があるというヒルサイズ(HS)225mのジャンピング台で、44歳になっても240mを超える大ジャンプを披露できる葛西選手は、歴史に残るレジェンドである。

どんな競技であれ、スポーツ選手の選手生命が長くなるのは良いことだ。往年の名

選手が、新進気鋭の選手と対等に戦う姿に感動を覚える。しかし、その復活劇や選手生命維持の背後には、凡人には想像もできない厳しいトレーニングが隠されている。それにしても、間もなく36歳にもなるうとするフェデラー選手が、引退の危機を乗り越え、最高のパフォーマンスを披露しているのはなぜだろうか

レベルアップしたフェデラー

フェデラーの選手生命を支えているのは、制球力のある速いサーブを武器にした、速いゲーム展開にある。210km/hや220km/hの高速サーブを打つ選手が多い中、フェデラーの平均球速190km/hはとくに速いわけではない。しかし、これは野球の投手と同じで、コーナーを突く制球力があれば、超高速のサーブは不要なのだ。フェデラーの球速は、投手との比較で言えば、140km後半の球速に相当する。制球に優れているから、エースにならなくても、相手の返球が甘くなり、それを叩いて比較的楽にポイントがとれる。フェデラーのゲームは長いラリーになることが少なく、勝っても負けても、試合時間が短いのが特徴だ。厳しいトーナメントが続く男子テニスの世界で、試合時間が短いことは体の負担が小さいことを意味する。このプレースタイルが、怪我を最小限にし、長い選手生命を保っている秘訣なのだ。

ただ、今年の復活劇を支えている最大の要因は、サーブス力というより、バックハンドストロークのレベルアップにある。フェデラーの最大の弱点は片手のバックハンドにある。ナダルは強烈なスピン(順回転)をかけた重くて高く跳ねるボールを、フェデラーのバックサイドに集中することで、ストローク戦で常に優位に立ってきた。フェデラーにとって、バックサイドを集中的に攻めら

れるのが泣き所だった。その結果、ナダルとの対戦成績はダブルスコアほどに開いている。ちなみに、ナダルのスピン(回転)数は、毎分4500回転前後である。1秒間の回転数は70~80回転で、ふつうの選手より2割ほど回転数が多い。

ところが、今年全豪決勝の対ナダル戦で見せたように、フェデラーはバックハンドからノータッチエースとなるストロークを何本も打ち、ナダルのバックハンド攻めを切り返した。明らかに、休養期間中のトレーニングがこの弱点の克服にあったことを教えている。35歳になってもそれを成し遂げるところに、フェデラーの凄さがある。引退間際の歳になっても、日々精進ということだ。これで今年に入って、苦手にしてきた対ナダル戦は3連勝である。

もう一つ見逃せないのは、フットワークである。フェデラーはもともと足が速い。しかし、何時の時点からか、細かなフットワークやボールを最後まで追うことをサボるようになった。長期にわたって頂点に立つ選手は、次第に、体力を消耗させずに試合を終わらせたいという気持ちが強くなる(省エネ症候群)。そこから、手を抜いたフットワークやプレーに陥りやすい。手抜きが日常化すると、プレーのレベルが下がる。ところが、長期の休養から復帰した今年のフェデラーは、生まれ変わったように、こまめなフットワークを欠かさず、球際まで追いかける攻撃的な姿勢を見せている。それが全盛期のような安定したショットを生み出している。

まるでサイボーグのように球を打ち返し、ここ数年間、無敵状態になっていたジョコヴィッチ選手もまた、今年に入って、この「省エネ症候群」に陥るようになった。日頃のトレーニングでも、フットワークをサボると、試合でもおろそかになり、全力でぶつ

RANKING	MOVE	COUNTRY	PLAYER	AGE	POINTS	TOURN PLAYED
1	-		Andy Murray	29	11,960	17
2	-		Novak Djokovic	29	7,915	18
3	-		Stan Wawrinka	32	5,765	20
4	↕ 2		Roger Federer	35	5,305	16
5	↕ 2		Rafael Nadal	30	4,735	15
6	↕ 1		Milos Raonic	26	4,345	20
7	↕ 3		Kei Nishikori	27	4,310	20
8	↕ 1		Marijn Cilic	28	3,385	21
9	↕ 1		Dominic Thiem	23	3,385	29

ATPランキング(2017年4月3日現在)

かってくる相手を交わすことができなくなる。ジョコヴィッチ選手の最近の連続敗戦の原因もまた、頂点に立つ選手が陥る「省エネ症候群」にある。ジョコヴィッチのコーチを離れたボリス・ベッカーは、ジョコヴィッチ選手の手抜きトレーニングに言及している。

ランキングが上位の選手は、大きな大会では、決勝まで6~7試合をこなさなければならぬ。だから、最初の試合から全力で戦うことはせず、試合を重ねるなかで、ギアを切り替えていく。力をセーブしながら、勝負所でギアをチェンジすることができるのが、トップ選手の強みなのである。しかし、相手選手はスタミナを気にすることなく、番狂わせを狙って、全力で向かってくる。しかも、相手選手の調子が非常に良いと、手抜きする上位選手はかなり苦戦を強いられる。大会の早い段階で上位シードが敗れるケースがこれである。上位選手にとって、緒戦の1~2戦は鬼門なのである。

錦織選手の不振の原因

フェデラー選手のレベルアップした要因が、まさに逆方向に働いているのが、今年

の錦織選手である。それもこれも、錦織が「省エネ症候群」に陥ってしまったからだ。

錦織選手のサーブ力は女子のトップ選手並みで、肝心なところでサーブゲームをキープできない。それが試合時間を長引かせ、体力を消耗させる。Miami Openの対ヴェルダスコ戦で、2セットとも早い段階で相手のサーブをブレイクし、自らのサーブゲームでセットを締めるチャンスを得た。しかし、2セットとも自らのサーブゲームを落とし、試合がもつれた。試合には勝ったが、2時間未満で終わられるはずの試合が、1時間以上も長くなり、3時間近い時間を要した。ただでさえ体の強さに問題がある錦織選手だ。弱いサーブが試合時間を長引かせ、体を痛めるという悪循環に陥っている。フェデラーと正反対のプレースタイルである。サーブ力を上げない限り、グランドスラムはもとより、ATP1000のタイトルを取るのも難しいだろう。

さらに、ここに来て目立つのは、プレーの粗さである。サーブを打った後、最適なボールの落下点へ足を運ぶフットワークがおろそかになっている。サーブを打った場所から足をまったく動かさず、細かなス

テップなしで返球することが多い。こうなると、ボールのコントロールを失い、ミスするケースが目立つ。フットワークが悪いと、錦織の武器である深い返球が影を潜め、浅く返ったボールをことごとく相手にヒットされ、ストローク戦で劣勢に立たされる。

願ってもないくじ運に恵まれたIndian Wellsの準々決勝対ソック戦、優位に立たなくてはならないストローク戦でこの悪い癖が出て、完全に力負けした。Miamiでは長い試合が2試合続いた結果、手首を痛め、準々決勝はフォニーニ選手に完敗した。

今年の錦織選手を見ていると、なるべく楽に試合を終えたいというプレーが見え見えになっている。錦織本来の攻めのプレーが陰を潜め、受け身の消極的なプレースタイルが目立つ。アグレッシブでない錦織はまったく相手選手の脅威ではない。サーブ力とフットワークの強化を怠ってはならない。フェデラーのように、初心に戻ってハードワークする姿勢が必要だ。錦織選手の奮起を促したい。

全員が30歳代に入るBig Four(フェデラー、ジョコヴィッチ、マリー、ナダル)がまだまだ力のあるところを見せているなか、次世代の若い選手たちが、錦織選手のすぐ背後に迫っている。狭間の世代にある錦織選手がトップを狙える時間はあまり残されていない。

(盛田 常夫記)

世界に一つだけの花

～ブダペスト補習授業校卒業式

パトラー 明日香

“世界に一つだけの花、一人一人違う種を持つ。

その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい・・・”

今年度はスマップのこの歌、「世界に一つだけの花」を何度も聞いた方も多いことでしょう。みどりの丘ブダペスト補習授業校の卒業式も、「世界に一つだけの花」の合唱で小学部6年生の3名が小学部を卒業しました。

“一人一人違う種をもつ・・・”“どれもみんなきれいだね・・・”

補習校の児童を見ていると「本当にそうだなあ」と思います。外見でいえば、同じ年齢でも頭一つ分以上背の高さが違ったり、髪の色でいえば、ブロンドから多色な茶色に漆黒の色。外見からは分からないが、今年の卒業生をみても、すでに3カ国以上の国での生活を経験している子もいれば、上手に九州アクセントで話せたり、平日ハンガリー現地校に通っているとは思えないほど流暢に日本語を使いこなせる子がいたり。

週に一度の補習校。授業時間が土曜日の朝ということもあり、「大変だね」、「補習校の宿題もしくちゃなの？」と現地校やインターの友達に言われていることはよく聞く話です。卒業生の一人は答辞で、「金曜日のパジャマパーティーに行けなかった」と正直に述べていました。もう一人の男の子は、「何度も補習校を辞めたいなあ」と思っていたそうです。5年生ともなると、平日に通っている現地校の授業内容も濃くなり、宿題やテストの量も増えてきます。それに加えて、4年生まではまだまだ遊びに近かった楽器のレッスンやスポーツも、真剣に取り組んでいかなければ上手にならないと気づきます。大人よりも毎日の予定が詰まっているほどです。しかし、

“ちゃんと胸を張っている・・・”

今年の卒業生は本当にその通りでした。原稿用紙5枚はあったでしょう。答辞の中で、補習校へ通う生徒の常套句、「補習校へ通うのは大変だった」と書いていた子は一人もいませんでした。それとは正反対に、「先生、中学部へあがったら、もっともっ

とまじめに授業に取り組みますね」や、「これからも漢字の読み書きに励みます」、そして「中学部のかかるた大会に向けて、密かにもう百人一首を覚え始めています」など、前向きな言葉が発せられていました。

補習校へ通い続けられるか否かの分岐点は4年生が始まる頃から5年生半ば頃。それまで親に言われてやっていた宿題が、自分で出来るようになる時期。この頃は精神的にも成長して日本語がもっと理解できるようになり、分かるようになるから宿題が嫌ではなくなる。親の立場からの表現でいうと、「子どもを補習校へ通わせる」から「子どもが補習校へ通う」でしょうか。その時期を乗り越えた卒業生だからこそ、「まだまだこれからも国語学習を頑張る!」という言葉がでてくのでしょうか。

“小さい花や大きな花、一つとして同じものはないから・・・”

補習校の児童は生まれた国も様々、両親の国籍も異なり、平日に通っている学校も違います。

そんな様々な環境で生活をしている子ども達の授業を組み立てるのは、補習校の先生にとって、簡単ではないでしょう。日本語のレベルも、使用環境も違います。卒業生が、6年生の担任先生は勿論、1年生からの歴代の先生方にも感謝の言葉を述べていました。補習校の先生の生徒に対する声かけは本当に重要です。本当に一人一人の児童にあった声かけが必要だからです。卒業生の皆さんは、毎年担任の先生方に沢山「やる気のでる言葉」をかけてもらったんでしょうね。

“No.1にならなくてもいい、もともと特別なオンリー1”

「オンリー1」の卒業生の皆さん、「オンリー1」の保護者の皆様、「オンリー1」の担任の先生方、本日は小学部のご卒業本当におめでとうございます。これからも「世界に一つだけのNo.1」でいてください。

(パトラー・あすか)





日本人学校

運動会での冒険

山本 錬

キラキラと光る太陽の下。少し涼しくなったかな。心地よい風が吹く中、ふれあい大運動会が行われた。小学生最後の運動会は、ぼくが「あとちょっとの6年生をがんばろう」と思わせてくれるような運動会だった。この運動会は、「ぼくなんか…」と思っていた自分を勇気づけてくれた。

僕が、この運動会で一番心に残ったことは競技や委員会のことではない。心のことだ。ぼくは、さっき書いた通り、自分に自信をもつことができてない。だから、一つ一つの競技から課題を見つければ、がんばれるかもしれないと思った。その中でも、徒競走が一番課題を達成できたと思った。

徒競走でぼくは「あきらめない」をできるようにしようと思った。一緒に走るのは、正剛さんと宏輝さんだった。練習の時

から「スポーツマンの2人と走るとか負けるに決まってるじゃん」と思った。本番のスタートも、半ばあきらめかけていた。「もう無理だ…」とどんどん差は広がった。「あきらめるな」という気持ちが心のどこかにあった。「そうだ、最後なんだ」と思うと、体育で習った、顔を上に向けず走るといことが頭に浮かんだので、できるだけ真っすぐにして走った。差は広がるままだったが、6年間の運動会で一番全力で走ることができた。

「いろんな事に楽しみを感じるのは大切」これは前、ぼくがハンガリーダンスを笑顔でおどれないことを学まると書いた時、先生がくれたアドバイスだ。課題を見つけることをゲームだと思うことで、楽しく課題を見つけることができた。一石二鳥、いや、三鳥くらいあるかもしれない。

徒競走で一番いい走りだったのはあきらめなかったからだ。ぼくは結局最下位だった。でも、気持ちでは1位だと思う。負けると分かってても、全力で走ってがんばれば、心では勝つんだということが分かった。

今までは「いけるかな？」と思っていたことはチャレンジしてこなかった。でも、この運動会ではぼくは、負けると分かっていても全力で走ることができた。そして、昔からずっと言われてきた「やらないで後悔するより、やって後悔するほうがいい」ということを守れた。まだまだ安心するのは早い。もっとがんばれるように自分自身に「失敗しても大丈夫だ」といえるようになりたい。

(やまもと・れん)



今の自分と昔の自分

林 夏子

私は、中学1年生をベトナム、ドイツで過ごし、2年生になってここに来た。中学1年生の時を振り返ってみると、今のような性格ではなかったと思う。こんなに先生に思ったことをズケズケ言うことはなかったし、言葉もきつくなかった。どちらかというと控えめで、何でも人の後をつけていく感じだった。だから、今のように他学年と交流することはほとんどなく、同学年の仲の良い子とだけ一緒にいた。それに、人の前に立って人をまとめるような役職に就くことは絶対になかった。

ここに来る前の学校では人数が多く、人の前に出ることが好きではない私が、人をまとめるような役職に就く必要はなかった。だから、他人に任せきりで自分からは前に出なかった。そんな他人任せの人間だった。だが、このブダペスト日本人学校に来てからは嫌でもそういうことをやらなくてはいけなくなった。人数が他の学校に比べ遥かに少なかったからだ。

転校して早々、私は委員会の副委員長をやることになった。だが、何をすればいいのか、どうすればいいのか、正解が全くわからない。そのため、毎回、委員会の時間が嫌で仕方なかった。しばらく慣れることができなかった。前期が終わる頃になって、ようやく慣れてきた。後期でもまた別の委員会の副委員長になった。前期

での経験によって何をすべきかわかってきたため、委員会がそこまで嫌ではなくなっていた。しかし、相変わらずうまくまとめることはできなかった。さらにその後もいくつかのリーダーを経験した。

中学3年生になって学級の人数が10人から8人になった。しかも男子5人、女子3人。それは女子1人当たりの負担が大きくなることを意味していた。案の定、私は学級委員をやることになった。人前に立つのが嫌いな私が一番嫌なものだった。学級をまとめる位置につくと、自分が皆より上の立場に立っている感じがするのが嫌だった。だが、やらなくてはならない。それがこの学校に来た宿命のようなものだったから。日が経つにつれそういつた前に出る仕事にも慣れ、自分のやり方で皆をまとめられるようになった。最初は、先生方や同級生などの助けに頼ってばかりだったが、回数を重ねるうちにだんだん自信がついてきた。

私がもしここに来ることなく、昔の学校のままだったとしたら、「人をまとめるような仕事につかない。他学年と交流せず、同学年とだけ親睦を深めればいい」と思っていたことだろう。そんな自分がこの学校に来て明らかに変わったのである。この学校に来られて、人をまとめる力がついた。同学年との絆を深くできた。他学

年と交流することができた。性格も明るくなった。本当に色々なことを学べた。少数の学校ならではの体験ができた。もちろん、「人数が少ないから、仕事が多すぎる」などとネガティブに考えたこともたくさんあった。だが、引退して、中心になって学校を動かす仕事がなくなった今、「自分の人生にとってプラスになることをやらせてもらえた」と思う。

ここの学校での生活を通して経験したこと、以前の中学校の生活との違いから考えたこと、得たもの、全てのことが今の自分にとって欠かすことのできない、忘れてはならないものだと思う。中学校1年生から今まで三つの学校での生活を経験し、最終的に今の自分にたどり着いた。そんな今の自分を大切にしながら次への階段を上っていきたいと思う。今は、中学校最後の年を皆と共に十分に楽しみながら、受験に向けての勉強に励もうと思う。今、中学部3年生の学級では常に笑いが絶えない。高校でも、そんな学級に出逢いたいと思う。まずは、学級の目標でもある「全員受かって帰ってくる。」の実現である。自分も望む高校に合格し、6人一緒に笑顔で卒業したいと思う。

(はやし・なつこ)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



2016-2017年度リスト音楽院日本人留学生 タイプロマ(卒業)コンサートスケジュール vol.1 4月～5月



- ◇4月29日(土)13時開演 リスト音楽院本校舎Solti Hall
中島 幸治 (ピアノ、大学院)
曲目: バッハ: イタリア協奏曲へ長調 Bwv971
ベートーヴェン: 創作主題による32の変奏曲 八短調 WoO.80
ドビュッシー: 版画
ショパン: ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op.11
共演: ドナウ交響楽団 指揮: アンドラーシュ・テアーク



- ◇4月29日(土)19時開演 会場: リスト音楽院本校舎Solti Hall
三谷 弘貴 (ピアノ、大学院)
曲目: ハイドン: ピアノ・ソナタ 八長調 Hob.XVI/50
シューベルト: 3つのピアノ曲 (即興曲) D 946
スクリャーピン: 幻想曲 口短調 作品28
ショパン: ピアノ協奏曲第2番へ短調 作品21
共演: Gödöllői交響楽団 指揮: 金井 俊文



- ◇5月5日(金) 13時開演 会場: リスト音楽院本校舎Solti Hall
鈴木 啓資 (ピアノ、大学院)
曲目: モーツァルト-リスト: アヴェ・ヴェルム・コルプス
リスト: ハンガリー狂詩曲第13番
リスト: 軽薄者の羊飼い
ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第3番
共演: Anima Musicae 室内合奏団
※指揮は鈴木さん本人による弾き振りです。

- ◇松永 みなみ (ピアノ、大学院) 会場: リスト音楽院本校舎Solti Hall
5月26日(金) 13時開演
曲目: バッハ: フランス組曲第5番ト長調 BWV816
シューマン: ピアノ5重奏 変ホ長調 OP.44
ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第5番「皇帝」変ホ長調OP.73
共演: ロマン・ミコラ、コヴァーチ・アティツラ、
ハルギタイ・ベンツェ、チュン・ホスン、有志オーケストラ
指揮: ドブサイ・ペーテル



- ◇5月27日(土) 13時開演 会場: リスト音楽院本校舎Solti Hall
山本 絵理 (ピアノ、大学院)
曲目: ショパン: ピアノソナタ no.3 in b minor op.58
モーツァルト: ピアノ協奏曲 no.23 A major その他
共演: Anima Musicae 室内合奏団, 他



注意: 無料コンサートですが、リスト音楽院大ホール及びシオルティーホールでの公演はリスト音楽院本校舎内にあるチケットセンター(1061 Budapest, Liszt Ferenc tér 8.)でチケット予約・受け取りする必要があります。
Email: zeneakademia@interticket.hu Tel: (06-1) 321-0690



2016-2017年度リスト音楽院日本人留学生 タイプロマ(卒業)コンサートスケジュール vol.2 ピアノリストコース



今年度のピアノリストコースには日本人2人のみ合格し在籍しています。



青木 佑磨



山中 歩夢

- ◇5月2日(火)19時開演 会場:リスト音楽院本校舎Solti Hall
ピアノソロプログラム
 - ♠ 山中 歩夢 曲目: リスト: ピアノソナタ その他
 - ♠ 青木 佑磨 曲目: シューベルト: ピアノソナタno.21変口長調 D.960
- ◇5月22日(月)19時開演 会場:リスト音楽院本校舎大ホール
ピアノコンチェルトプログラム
 - ♠ 青木 佑磨 曲目: ブラムス: ピアノ協奏曲第2番 変口長調 Op.83
 - ♠ 山中 歩夢 曲目: リスト: ピアノコンチェルト第2番
 共演: ファイロニ室内オーケストラ

注意: 無料コンサートですが、リスト音楽院大ホール及びショルティホールでの公演はリスト音楽院本校舎内にあるチケットセンター(1061 Budapest, Liszt Ferenc tér 8.)でチケット予約・受け取りする必要があります。

Email: zeneakademia@interticket.hu Tel: (06-1) 321-0690



Propart Hungary Bt.

各種音楽・芸術文化・国際交流イベント企画製作を中心とした業務の運営。
ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネージメント展開を行っています。
お気軽に、御相談下さい。

Propart Hungary Bt.
Tel: +36-1-786-7846 / Mobil: +36-70-3815548
e-mail: proparthungary@upcmail.hu
proparthungary@gmail.com
web: <http://propart.client.jp/>

【主な業務内容】

- ・音楽企画・マネージメント業務
- ・ヨーロッパ各国のコンサート/オペラ/バレエ/オペレッタ/舞踊・各劇場公演
- ・音楽講習会 / プライベートレッスン / 音楽研修企画
- ・国際交流事業サポート
- ・若手音楽家の推進育成サポート
- ・東欧・ハンガリー留学サポート・現地コーディネーター
- ・短・長期賃貸物件仲介業務(ブダペスト市内を中心とした、ハンガリー国内)
- ・各種通訳・翻訳サポート(ハンガリー語、英語、ドイツ語、日本語)
- ・購入・レンタルピアノ
- ・輸入・輸出楽器
- ・各種現地サポート(主にハンガリー、東欧、ヨーロッパ各国)
- ・文化・芸術関係テレビ取材・撮影・リサーチ・コーディネーター等
- ・ハンガリー発日本語情報誌『パブリカ通信』発行
- ・その他、音楽制作に関わる一切の業務

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneco Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア

ハイパーサーミアのパラダイム転換—医術から医学へ

サース・アンドラーシュ / 盛田常夫 [著]



日本評論社

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第4章 腫瘍温熱療法

- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
- 4.2 ハイパーサーミアの手法
- 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
- 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場(コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
- 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章 オンコサーミアの理論と方法

- 5.1 電場の利用
- 5.2 細胞燃焼
- 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
- 5.4 ミクロスコピック加熱
- 5.5 集束化の原理
- 5.6 温度の役割
- 5.7 安全性
- 5.8 積算量(ドーズ)
- 5.9 臨床事例

第6章 自然療法としてのオンコサーミア

- 6.1 ホメオスタシスの復位
- 6.2 細胞の自然死の促進
- 6.3 細胞転移の阻止
- 6.4 転移がん細胞に作用

第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価

- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
- 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
- 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
- 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章 ハイパーサーミアの物理学

- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
- 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
- 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム

第3章 ハイパーサーミアの生理学

- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
- 3.2 生体における温度制御
- 3.3 生体の加熱と体温
- 3.4 加熱による温度の分布
- 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
- 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
- 3.7 温度測定と熱積算量(ドーズ)



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

